断声

——ある夜鳴きそば屋の詩（うた）

青木辰男遺作集

青木五郎・編

断声

——ある夜鳴きそば屋の詩（うた）

青木辰男遺作集

青木五郎・編

牧歌舎

青木辰男遺作集
断声 —— ある夜鳴きそば屋の詩(うた)

2015年3月31日　初版第1刷発行
編　者　青木 五郎
発行所　株式会社 牧歌舎
〒664-0858 兵庫県伊丹市西台 1-6-13 伊丹コアビル 3F
TEL.072-785-7240　FAX.072-785-7340
http://bokkasha.com　代表：竹林 哲己
発売元　株式会社 星雲社
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-21-10
TEL.03-3947-1021　FAX.03-3947-1617
印刷・製本　中央精版印刷株式会社
© Goro Aoki 2015 Printed in Japan
ISBN978-4-434-20521-7 C0092

落丁・乱丁本は、当社宛にお送りください。お取り替えします。

作品Ⅰ　詩

1、『市民詩集』作品

（昭和三十八年～平成二十一年）

どこへ　11
黒い喜劇　12
囚人の賦　14
秩序のなかの人間　16
ある冬の日に　18
燔祭（はんさい）　20
火の村の旅人　22
だからわたしは　23
柩・空港　24
内部の人　25
終りなき生存　28
崖の鏡　30
意識劇 ―意識は存在の馭者たりうるか　31
言葉と風景へのこころみ　33
闇部考　35
失眼あるいは耳壊への註　37
八月の荒野　38
内暴篇（一）　39
内暴篇（二）　40
内暴篇（三）　41
内暴篇（四）　42
内暴篇（五）　43
内暴篇（六）　44
内暴篇（七）　45
内暴篇（八）　46
内暴篇（九）　48
内暴篇（十）　49
内暴篇（十一）　50
内暴篇（十二）　51
内暴篇（十三）　52
内暴篇（十四）　53
内暴篇（十五）　55
内暴篇（十六）　56
内暴篇（十七）　58
内暴篇（十八）　59
内暴篇（十九）　61

内暴篇（二十）　62
内暴篇（二十一）　64
内暴篇（二十二）　66
内暴篇（二十三）　67
内暴篇（二十四）　68
内暴篇（二十五）　70
内暴篇（二十六）　72
内暴篇（二十七）　74
内暴篇（二十八）　75
内暴篇（二十九）　77
内暴篇（三十）　78
路頭抄（一）　79
路頭抄（二）　80
路頭抄（三）　81
路頭抄（四）　83
路頭抄（五）　84
仮寓抄（一）　86
仮寓抄（二）　88
仮寓抄（三）　90
仮寓抄（四）　92

杳然抄（ようぜん）　94
秋意抄　96
去来抄　97
水声抄　99
潰井抄（つぶらい）　101
暮端抄　102
胴体抄　103
夢夜抄（ぼうや）　104
ただ、この冷えゆく宇宙の闇を塒（ねぐら）として　105
異面抄（ベルソナ）　106
敗荷抄　108
水深抄　110
如月抄　112
茸茸抄（くさむら）　114
泯泯抄（びんびん）　117
巽風抄（おしあな）　118
木雁抄　119
石寥抄　121
牢記抄　123
森閑抄　125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

沈木(うずみぎ)抄 127
一果抄 130
莫莫抄 132
頓丘(ひたお)抄 135
深秋抄 137
付箋抄 138
つれづれの遺文 140
時景抄 141
独語抄 142
老年抄 144
季過抄 145
出郷抄 146
臘月抄 147
秋天抄 148
青の裁量 149
本質的孤独について 150
流亡賦 151
斥候(ものみ)と物体 152
尺進という夢魔 153
断声 154

2、『原語』作品

（昭和三十九年）

みんな みんな みんな 156
冬であらねば 158
上非人と下非人の対話 159

青木辰男遺作集

断声

――ある夜鳴きそば屋の詩（うた）

青木辰男の横顔

山田　寂雀

私が青木辰男と出会ったのは昭和三十八年の初頭であった。当時、米原子力潜水艦が日本に寄港するにつき、その安全性が世間を騒がしていた。市民詩集の会が発足して早や八年目で、当時、愛知県庁の西にあったスポーツ会館の会議室が、会の恒例の詩話会の会場であった。

その時分の青木の印象は別段、確たることもなかった。弁舌さわやかでもなく、どちらかと云えば他人の話の聞き役にまわっていた。併し、彼の詩作品のボキャブルの多様性は他人を抜きんでて、特に印象深いものがあった。会場には自己批評の能力を持った詩人が多かったが、彼は決してひけをとらなかった。当時、彼は新左翼の暴力を否定していた。もちろん、会員の多くは命令する人間にはなりたくないと思っていたようだ。それが、当時の彼の人生観の表裏となっていたと私は推察するものだ。例会に出席する彼のスタイルは決してみせびらかすのではないが、ネクタイをきちんと締めたゼントルマン然であった。だから彼が屋台店のおやじだとは誰も知らなかった。ただ、人を信じてだまって後についてくるか、それとも「ノウ」という選択をきちんとする性格を持つ男かいずれにも決めかねた存在だった。

当時、彼は名古屋の郊外であった守山に住居を構えていた。そこより毎夜、夜の繁華街近くの市電交叉点、上前津で乗り降りするサラリーマンの格好のいこいの場として、一ぱい飲み屋の屋台を

開いていた。割合、売上げもあったが、リヤカーにのせた屋台道具一式に、食材、食器などはかなりの重量で、守山から片道五粁の道程は「若い」とはいえ、かなりの重労働で、後日、彼の肉体はこの責苦によって痛みつけられる結果となった。だが、当時の彼はねじり鉢巻、酔えば客と共に『ちゃきりおけさ』を歌うおやじに変身していた。このユートピアも道路愛護運動の余波で屋台群は後日撤去されてしまう破目になるのだが――。

彼には九人の兄弟姉妹がいたとか、何日(いつ)か聞いたことがあるが、妻と名のつく方は聞いたことはない。この詩集の作品から知る限り、若死した妹がいたことが知らされる。「仮寓抄」四、「去来抄」などから推察できる。又、作品「ある冬の日」に登場する少女は他人であるが、彼の詩作品では数少ない女性の一人である。彼の死水を摂り供養され、彼も最も信頼していた、弟の五郎は兄弟姉妹中唯一人の生存者で、現在、京都教育大の名譽教授として活躍してみえる。

この詩集に網羅した九十三篇の作品はかって市民詩集で、披露したものだが、その以外にも彼の詩作品はある筈だ。いつかはそれらもみつかると思う。私は彼の作品を決して、甲乙をつける気はない。なぜなら、当然ながら見方によってはそのよさが変るのであって、又、時代の移り代りによっても同じことが云える。ただ云えることは絶えずほとばしる情感は常に目を凝らすものがあるので諸兄姉もきっと何かをみつけだすと思う。

ただ、彼の処世上の理想のイメージと現実の姿とはかなりかけ離れていて、世相に反逆することも往往あった。例えば共産党員であるのに彼の口から市民詩集の会では党の宣伝めいたことは一言も聞いたことはない。そこには党の理想と現実が彼の考えと食い違っていたかも知れない。肉体の酷使は彼の意志如何にもかかわらず、夢破れた世では呻吟しなければならなかった。理想はあくま

で夢であったことを知った以上、いやが上に現実を押しつけられた男の一生は如何なるものであったのであろうかと想像してみる。

最後に、云えることに、この詩集で作者の詩の形式を短歌、俳句の姿に移行しようと試みていることだ。最後に掲載された作品『断声』は作者の大胆な試みの一つで、詩の分野である作品を、短歌、俳句の世界へと浸透させようとしていた。もともとこの三分野は共通の土壌で育ったものであるが、彼の場合は短歌、俳句から詩へではなく、詩の世界から短歌又は俳句の世界へ戻入しようと模索している。それは俳句の世界の方が詩より思想的、社会的に、より無自覚である現実を無視しているともとられる危惧があった。所謂、詩歌は作者の経験が読者によって再生産されてこそ、そこに芸術のだいご味がある筈だ。一つのジャンルが他のジャンルに心が引かれるならば芸術は衰退してしまう。そのことを彼は知って敢えて断行しようとする試策をより適正に私たちに教えてほしかったと思う。

それに、彼は死を以って、私たちに問いかけたのは一体、何であったのか。謎として吾人よりそれを遠ざけることは出来ない。その答は遺稿よりまさぐらなければなるまいが、彼の人生の生き方をしみじみ味わえば、単なる個々の内的慾求不足では終わらしめることは出来ない。けわしさときびしさにとりまかれた世に、生き切った詩人の姿を私たちはそこに見ようとしている。

今の沈滞した詩壇から将来ある彼をむざむざ亡くしてしまったことは慚愧に堪えない。いつの世にか彼の志を継ぐ者が出現するのを待つのみで、今はただ彼の冥福を祈るのみ。

（日本詩人クラブ永年会員 市民詩集の会会長）

青木辰男遺作集

断声――ある夜鳴きそば屋の詩（うた）

目次

青木辰男の横顔　山田寂雀

作品Ⅰ　詩

作品Ⅱ　俳句・短歌

作品Ⅲ　評論・随筆・その他

作品発表誌

青木辰男の略歴　青木五郎

編集後記　同右

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作品Ⅰ

詩

作品Ⅰ　詩

1、『市民詩集』作品

（昭和三十八年～平成二十一年）

どこへ　11
黒い喜劇　12
囚人の賦　14
秩序のなかの人間　16
ある冬の日に　18
燔祭（はんさい）　20
火の村の旅人　22
だからわたしは　23
柩・空港　24
内部の人　25
終りなき生存　28
崖の鏡　30
意識劇 ―意識は存在の馭者たりうるか　31
言葉と風景へのこころみ　33
闇部考　35
失眼あるいは耳壊への註　37
八月の荒野　38
内暴篇（一）　39
内暴篇（二）　40
内暴篇（三）　41
内暴篇（四）　42
内暴篇（五）　43
内暴篇（六）　44
内暴篇（七）　45
内暴篇（八）　46
内暴篇（九）　48
内暴篇（十）　49
内暴篇（十一）　50
内暴篇（十二）　51
内暴篇（十三）　52
内暴篇（十四）　53
内暴篇（十五）　55
内暴篇（十六）　56
内暴篇（十七）　58
内暴篇（十八）　59
内暴篇（十九）　61

内暴篇（二十）　62
内暴篇（二十一）　64
内暴篇（二十二）　66
内暴篇（二十三）　67
内暴篇（二十四）　68
内暴篇（二十五）　70
内暴篇（二十六）　72
内暴篇（二十七）　74
内暴篇（二十八）　75
内暴篇（二十九）　77
内暴篇（三十）　78
路頭抄（一）　79
路頭抄（二）　80
路頭抄（三）　81
路頭抄（四）　83
路頭抄（五）　84
仮寓抄（一）　86
仮寓抄（二）　88
仮寓抄（三）　90
仮寓抄（四）　92

杳然抄（ようぜん）　94
秋意抄　96
去来抄　97
水声抄　99
潰井抄（つぶらい）　101
暮端抄　102
胴体抄　103
夢夜抄（ぼうや）　104
ただ、この冷えゆく宇宙の闇を塒（ねぐら）として　105
異面抄（ベルソナ）　106
敗荷抄　108
水深抄　110
如月抄　112
茸茸抄（くさむら）　114
泯泯抄（びんびん）　117
巽風抄（おしあな）　118
木雁抄　119
石寥抄　121
牢記抄　123
森閑抄　125

沈木(うずみぎ)抄 127
一果抄 130
莫莫抄 132
頓丘(ひたお)抄 135
深秋抄 137
付箋抄 138
つれづれの遺文 140
時景抄 141
独語抄 142
老年抄 144
季過抄 145
出郷抄 146
臘月抄 147
秋天抄 148
青の裁量 149
本質的孤独について 150
流亡賦 151
斥候(ものみ)と物体 152
尺進という夢魔 153
断声 154

2、『原語』作品

（昭和三十九年）

みんな みんな みんな 156
冬であらねば 158
上非人と下非人の対話 159

●詩

1、『市民詩集』作品

昭和三十八年

どこへ

あなたは知つている
　多くの行動が挫折したことを
あなたは知つている
　多くの沈黙が夥しい破壊へと繋がつて来たことを
あなたは知つている
　歴史が負うて来た幾つかのいたみのプロセスを
あなたの心の深いところでいつも波打つている
崩壊と創造の
果てしないリフレイン
　あの日――
それはとても重苦しい日だつた
日本中が激しい忿(いか)りに包まれていた
性懲りもない独裁者の　無謀な圧力に
ひとつの潮となつて
大衆のひたむきな抗いが
暗い現実の
紛れもない象徴として地表を覆つていた
　あの日から三年――
遺された一本の　黒い骨を抱えて
あなたはどこへゆくのか
　平和だという　少なくとも明るい昨今だという
もうあなたは必要のない存在かもしれない
道化師のようにわらいながら
あなたはどこへゆくのか
薄明の樹枝を震わせて
しろい風が
ある暗示のようにしずかに吹いていた

（十二月号）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com